

(9 月 29 日)「サムエル記上 26 : 1～11」

ダビデはアビシャイに言った。「殺してはならない。主が油を注がれた方に手をかければ、罰を受けずには済まない。」 (サムエル記上 26 章 9 節)

・24 章で和解したかのように見えたサウルとダビデですが、聖書はまた同じような物語を語ります。ダビデの居場所を告げられたサウルが、自分の兵を率いてダビデを捜すという物語です。

・ただ 24 章のときと違い、今回ダビデはアビシャイと共にサウルの元に行きます。彼らはサウルとその軍の司令官アブネルが寝ている場所を見つけ、自分たちの意思でそこに向かうのです。ダビデたちは夜になってサウルの兵士たちに近づきました。

・すると不思議なことに(その理由は明日わかります)、兵士も司令官アブネルも、そしてサウルも眠り込んだままでした。そこでアビシャイは、サウルの殺害を提案します。しかし 24 章同様、ダビデは主が油を注いだ方に手をかけてはならないと立ち去ります。

(9 月 30 日)「サムエル記上 26 : 12～20」

お前の行いは良くない。主は生きておられる。お前たちは死に値する。主が油を注がれた方、お前たちの主人を守れなかったからだ。さあ、枕もとの槍と水差しがどこにあるか見てみよ。」 (サムエル記上 26 章 16 節)

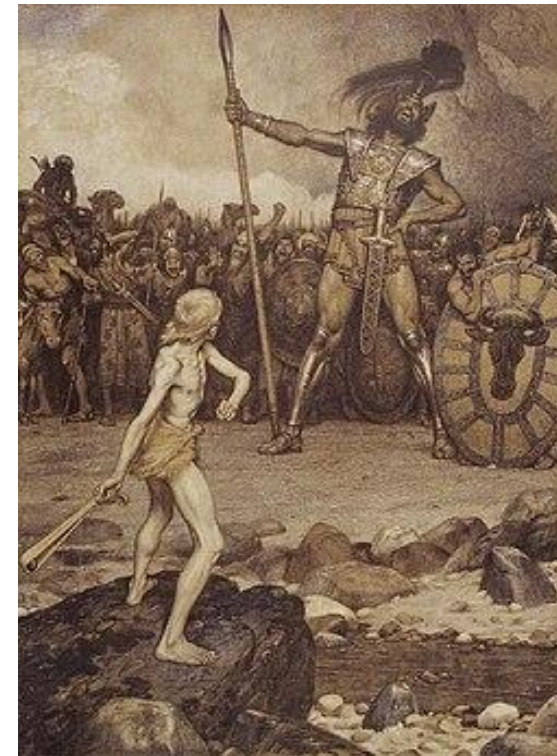
・ダビデにはサウルを殺害する機会がありましたが、「主が油を注いだ方」に手をかけることはしませんでした。その代わりにサウルの枕もとから、槍と水差しを取って立ち去ります。神さまがサウルたちに深い眠りを与えたために、全員が眠り込んでいました。

・そしてダビデは遠く離れた山の頂に立って、アブネルに向かって呼びわります。アブネルはサウルの軍の指揮官です。王を守るのが、大切な任務です。しかしダビデが言うように、サウルの枕もとには槍と水差しはそこにありませんでした。

・そのやり取りを聞いていたサウルは、その声がダビデのものだと気づきます。そのサウルに対し、ダビデは「わが主君、王よ」と繰り返します。この言い方は少し嫌味にも聞こえますが、ダビデの心の中には「いい加減にしてくれ」という思いもあったでしょう。

サムエル記上 通 読

9 月



(9月 1日)「サムエル記上 17 : 31～40」

わたしは獅子も熊も倒してきたのですから、あの無割札のペリシテ人もそれらの獣の一匹のようにしてみせましょう。彼は生ける神の戦列に挑戦したのですから。」
(サムエル記上 17 章 36 節)

・兄たちのところに来たダビデはイスラエルの兵士に挑戦するゴリアトの姿を見て、周りの人たちに「あの男を討ち取る者はどうしてもらえるのか」と繰り返し聞いていました。そしてそのダビデの様子をサウル王に告げる者がいました。

・サウルに召し寄せられたダビデは、自分が行ってゴリアトと戦うと告げます。サウルはダビデを見て、そんなことなどできないと言います。それはダビデがまだ少年であり、ゴリアトとは経験も体格も、かなりの差があったからでしょう。

・しかしダビデは、「主が守ってくれる」と言います。16 章の終わりに、ダビデが竖琴によってサウルから悪霊を追い出した記事がありました。サウルはそのときのことを思い出したのかもしれませんが。彼をゴリアトの元に行かせます。

(9月 2日)「サムエル記上 17 : 41～47」

彼は見渡し、ダビデを認め、ダビデが血色の良い、姿の美しい少年だったので、侮った。
(サムエル記上 17 章 42 節)

・サッカーなどで格下のチームが実力差のある強豪に勝利することを、ジャイアントキリング（ジャイキリ）と呼ぶことがあります。格下のチームの戦術がはまって起こることもあれば、強豪チームの油断によってそのような結果になることもあります。

・ゴリアトはダビデを一目見て、侮りました。兜も鎧も外し、剣さえも持たないダビデ。その手には羊飼いの杖と五つの石が入った投石袋、そして石投げ紐だけがありました。これまで戦ってきた戦士とは、毛色の違う少年がやって来たのです。

・しかしダビデは、ゴリアトにこう言います。「お前は剣や槍や投げ槍でわたしに向かって来るが、わたしはお前が挑戦したイスラエルの戦列の神、万軍の主の名によってお前に立ち向かう」。ダビデは「この戦いは主のものだ」と宣言するのです。

(9月 27日)「サムエル記上 25 : 23～34」

ダビデはアビガイルに答えた。「イスラエルの神、主はたたえられよ。主は、今日、あなたをわたしに遣わされた。

(サムエル記上 25 章 32 節)

・アビガイルはダビデを見るとひれ伏し、長々と弁明を述べます。ナバルによってもたらされたダビデの怒りを、ナバルの妻アビガイルが収めようとするのです。このような妻がいると、とても心強いですね。

・ただしアビガイルは、「夫ナバルを助けるため」という思いでやったのではないようです。それよりも従者や財産を守りたいという思いが強かったのでしょう。またダビデのことを、「主によって遣わされた方」だと認めていたようです。

・ダビデは相当頭に血が上っていました。しかしアビガイルの言葉を聞き、神さまの思いに気づかされます。そのままでは多くの血が流されていたでしょうが、アビガイルの行動によってそれが回避されたのです。

(9月 28日)「サムエル記上 25 : 35～44」

翌朝、ナバルの酔いがさめると、彼の妻は成り行きを話して聞かせた。ナバルは意識を無くして石のようになった。

(サムエル記上 25 章 37 節)

・ダビデとアビガイルが会ったことなど露知らず、ナバルは上機嫌でした。ダビデは尻尾を巻いて逃げたに違いないと思ったのかもしれませんが。アビガイルが帰ったとき、ナバルは宴会を催していました。

・その宴会は、「王の宴会にも似た」と形容されています。ナバルは分不相応なことをしてしまったのかもしれませんが。アビガイルは翌朝、ダビデとの出来事をナバルに話します。それを聞いたナバルは意識を無くし、10 日ほど後に主に打たれて死んでしまいます。

・ダビデを侮辱したナバルは、神さまによって命を落としました。そのことは、ダビデが主に選ばれた者だということを人々にも知らせめたことでしょう。そしてダビデは、殊勲の女性アビガイルを自分の妻として迎え入れます。

(9月 25日)「サムエル記上 25 : 1~11」

ナバルはダビデの部下に答えて言った。「ダビデとは何者だ、エッサイの子とは何者だ。最近、主人のもとを逃げ出す奴隷が多くなった。

(サムエル記上 25 章 10 節)

・1 節で唐突に、サムエルの死が語られます。サムエルが最後に出て来たのは 19 章でした。サムエル記上は 31 章まで、さらにサムエル記は下巻もあるというのに、そのタイトルの人物は早くもここで亡くなってしまうのです。

・全イスラエルがサムエルの死を悼みました。その中にはダビデだけではなく、サウルもいたことでしょう。そしてダビデは、パランの荒れ野に下っていきました。そこで、ナバルという男が羊の毛を刈っていると聞きます。

・ダビデは自分の従者が厚意にあずかれるようにナバルに願います。ただ丁寧に言っていますが、要はあなたの財産をわたしたちに分け与えよということです。ナバルはその申し出に対して怒ります。当たり前かもしれませんが。

(9月 26日)「サムエル記上 25 : 12~22」

御主人にも、この家の者全体にも、災いがふりかかろうとしている今、あなたが何をなすべきか、しっかり考えてください。御主人はならず者で、だれも彼に話しかけることができません。」

(サムエル記上 25 章 17 節)

・ヘブライ語で「愚か者」のことを、「ナーバル」と言うそうです。ナバルはダビデの申し出を拒否しました。それは「愚か」だということでしょうか。ナバルの回答に怒ったダビデは兵を率いて、ナバルに属する男をみな殺しにしようとしします。

・ただここで、二人の人物が戦いを回避させるために動きます。一人はナバルの従者の一人です。彼は完全にダビデを善、ナバルを悪として、ナバルの妻アビガイルに何をなすべきか考えるようにと進言します。

・そしてもう一人、アビガイルはそれを聞き、急いでパンやぶどう酒、料理などを用意します。彼女は、ダビデの兵が自分たちを守っていることを知っていたからこのようにしたのでしょう。またナバルの態度に普段から我慢ならなかったのかもしれませんが。

(9月 3日)「サムエル記上 17 : 48~54」

ダビデは石投げ紐と石一つでこのペリシテ人に勝ち、彼を撃ち殺した。ダビデの手には剣もなかった。

(サムエル記上 17 章 50 節)

・戦いが始まりました。大相撲は立ち合いの良し悪しで勝負がほぼ決まるそうです。そのためお相撲さんは、立ち合いに全神経を使います。ダビデに近づいてくるゴリアトに対し、ダビデは「戦いの場」へと走っていきます。

・多分ダビデは、一直線にゴリアトに向かって行きませんでした。というのも彼は、「飛び道具」を持っていたからです。彼は羊を守るとき、いつもこのように攻撃をしていたのでしょう。一発でゴリアトを倒しました。

・ダビデはゴリアトの剣で、ゴリアトにとどめをさしました。そしてペリシテ軍は逃げ出します。しかしいくら体格差があったとしても、一対一の勝負でいきなり飛び道具を使うのは、何だか卑怯のように思うのですが。

(9月 4日)「サムエル記上 17 : 55~58」

ダビデがああペリシテ人を討ち取って戻って来ると、アブネルは彼を連れてサウルの前に出た。ダビデはああペリシテ人の首を手を持っていた。

(サムエル記上 17 章 57 節)

・この 17 章の記述を読むと、16 章 14~23 節でダビデとサウルが出会った出来事は忘れ去られているようにも思えます。聖書にはこのようなことがたびたび見られますが、それは様々な伝承が集められて出来たためだと言われている。

・サウルはダビデがゴリアトを討ったのを見て、ダビデの素性を軍の司令官であるアブネルに聞きますが、彼は何も知りませんでした。16 章でダビデを連れてきたサウルの家臣は近くにはいなかったのかもしれませんが。

・サウルはダビデに、初対面のように聞きます。「お前は誰の息子か」と。当時イスラエルでは、家系がとても大事にされていたのでしょう。エッサイの息子であることを告げるダビデ。それを聞いても、サウルはピンとこなかったようです。

(9月 5日)「サムエル記上 18 : 1～9」

ダビデがサウルと話し終えたとき、ヨナタンの魂はダビデの魂に結びつき、ヨナタンは自分自身のようにダビデを愛した。(サムエル記上 18 章 1 節)

・ダビデは、イスラエルの兵士たちが恐れたゴリアトを討ち取りました。そしてサウルは、ダビデを召し抱えます。彼はダビデが父エッサイの家に帰るのを許しませんでした。ダビデとサウルが話し終わったあと、ダビデはサウルの息子ヨナタンと出会います。

・ヨナタンはその英雄的な行動(14 章)により、イスラエルでは大変な人気だったと思われます。また王の息子であるため、王位継承権もあると人々からは思われていたのかもしれませんが。

・ヨナタンは、自分自身のようにダビデを愛します。そしてダビデと契約を結びます。しかし反面、ヨナタンの父サウルからはダビデは妬まれるようになります。それはダビデが手柄を立てすぎて、人々が彼をほめ讃えたすぎたからです。何事もほどほどがいいですね。

(9月 6日)「サムエル記上 18 : 10～19」

イスラエルもユダも、すべての人がダビデを愛した。彼が出陣するにも帰還するにも彼らの先頭に立ったからである。(サムエル記上 18 章 16 節)

・サウルは、人々が自分よりもダビデのことを評価しているように思い、激怒し悔しがります。そのサウルの心に、悪霊が降ります。その悪霊は、神さまから与えられたものでした。よくない思いを持つと、もっと悪い心になってしまうのです。

・サウルは直接槍でダビデを突き刺そうとしますが、ダビデは二度、それをかわしました。もう主はサウルの元を離れ、ダビデと共におられたのです。しかしサウルはそれを受け入れることができず、ダビデを遠ざけようとします。

・さらにダビデは戦いに行っては勝利を収め、人々に愛されます。そこでサウルは自分の娘メラブをダビデに嫁がせようとします。サウルはダビデを自分の婿にすることで、より危険な戦場に向かわせようとしたのでしょうか。しかしその結婚は実現しませんでした。4

(9月 23日)「サムエル記上 24 : 8～16」

主が裁き手となって、わたしとあなたの間を裁き、わたしの訴えを弁護し、あなたの手からわたしを救ってくださいますように。」

(サムエル記上 24 章 16 節)

・ダビデのそばには、400 名もの人たちが集まっていました。その人たちはダビデの兄弟や父の家の者だけではなく、困窮している者、負債のある者、不満を持つ者でした(22 章 1～2 節)。つまり王であるサウルのことをよく思っていない人が多くいたわけです。

・洞窟にサウル王が用を足しに来たことは、彼らにとって千載一遇のチャンスでした。しかしダビデは兵がサウルを襲うのを許しません。それどころか洞窟を出たサウルに対してひれ伏し、サウルに語りかけるのです。

・ダビデは自分の身の潔白を語り続けます。しかしこのダビデの言葉をよく見ると、「神さまはもうわたしの味方になっている」というニュアンスが所々に見られます。上着の端を切り取られても気づかなかった事実を知り、サウルは何を思ったのでしょうか。

(9月 24日)「サムエル記上 24 : 17～23」

今わたしは悟った。お前は必ず王となり、イスラエル王国はお前の手によって確立される。

(サムエル記上 24 章 21 節)

・ダビデの言葉を聞いて、サウルは怒ることなくその状況を受け入れました。洞窟でダビデに引き渡されそうになったことも神さまのみ心だとすると、もうサウルはどうすることもできないのです。サウルは自分の悪意を認め、声をあげて泣きました。

・サウルはダビデこそがイスラエル王国を確立させる王となることを悟り、ダビデに対して「主によってわたしに誓ってくれ」とまで言います。ダビデに完全に負けたことに気づかされ、心から悔いているのです。

・しかしここで終わらないのが、聖書の物語です。果たしてサウルはダビデを追うことをあきらめたのでしょうか。その結果は 5 日後くらいに読む箇所で見分かります。どうぞ、お楽しみに！

(9月 21日)「サムエル記上 23 : 15～28」

サウルは山の片側を行き、ダビデとその兵は山の反対側に行った。ダビデはサウルを引き離そうと急いだが、サウルとその兵は、ダビデとその兵を捕らえようと、周囲から迫って来た。(サムエル記上 23 章 26 節)

- ・サウルの子ヨナタンはホレシヤにいるダビデのもとに行き、ダビデを励ました。よく父であり王であるサウルの目を盗んで行けたものだと思いますが、それぞれの従者が活躍したのかもしれませんが。
- ・ヨナタンとダビデは互いに愛し合い、契約を結んでいました。しかし聖書の中で二人が出会うのは、ここが最後になります。ヨナタンは王の子でありながらダビデに対し、「イスラエルの王になるのはあなただ」と告げます。
- ・ダビデはジフの荒れ野ホレシヤに留まりますが、ジフの人々はギブアに上り、サウルにダビデのことを報告します。それを聞いたサウルはダビデを追跡しますが、ペリシテ人が攻めてきたので国に戻ります。しかしこれからも、サウルの執拗な追跡は続いています。

(9月 22日)「サムエル記上 24 : 1～7」

途中、羊の囲い場の辺りにさしかかると、そこに洞窟があったので、サウルは用を足すために入ったが、その奥にはダビデとその兵たちが座っていた。(サムエル記上 24 章 4 節)

- ・23 章でサウル王は、ダビデを追い詰めました。しかしペリシテ人が国に攻め入ったと聞き、ダビデを追うことをやめていました。しかしペリシテ人を追い払った後、またサウルはダビデとその兵を追います。
- ・この執念は、一体どこからくるのでしょうか。ただこのときすでにサウルは神さまから見捨てられ、その祝福はダビデに移っていました。サウルはダビデとその兵がいる洞窟に用を足すために入りますが、それは神さまが仕組んだことだったのでしょう。
- ・しかしダビデは、その場でサウルを殺害することを良しとしませんでした。腐っても鯛と言いますが、サウルは王として油注がれた者です。そのように「聖別」された人物の手をかけてはならない、そう考えてダビデはサウルの上着の端をひそかに切り取ります。 12

(9月 7日)「サムエル記上 18 : 20～30」

サウルの家臣はこれらの言葉をダビデの耳に入れた。ダビデは言った。「王の婿になることが、あなたたちの目には容易なことと見えるのですか。わたしは貧しく、身分も低い者です。」

(サムエル記上 18 章 23 節)

- ・サウルはもう一人の娘ミカルを使って、ダビデを自分の婿にしようとしています。それはダビデと近い親戚関係になりたいのではなく、ダビデを身内としてより危険な戦場に行かせるためでした。
- ・ダビデは最初その申し出を断りますが、「王の望みは王の敵への報復のしるし」という言葉を聞いて、王の婿になることは良いことだと思い直します。そして王の求める倍のしるしを持ち帰るのです。
- ・ダビデは純粋に、サウル王のために行動しました。どうしてもミカルと結婚したかったわけではなかったと思います。しかしサウルはこの出来事によっていっそうダビデを恐れ、敵意を抱くことになったのです。

(9月 8日)「サムエル記上 19 : 1～8」

ヨナタンはダビデを呼んで、これをすべて彼に告げた。ヨナタンはサウルのもとにダビデを連れて行き、ダビデはこれまでどおりサウルに仕えることになった。(サムエル記上 19 章 7 節)

- ・18 章 3 節にあったダビデとヨナタンとの契約の内容は書かれていませんが、父サウル「ダビデを殺すように」という命令を聞いて、ヨナタンは二人の間に入ることを決意します。王の息子としては、あまり好ましくない行動かもしれません。
- ・しかしヨナタンはまずダビデに、命を狙われている事実を知らせます。そして父サウルに、ダビデの功績を伝えます。イスラエルのために働き、大勝利を与えてきたダビデを殺すことは罪だと、父に告げるのです。
- ・父親にこのようなことを言うのは、タブーだったでしょう。しかしヨナタンはダビデを愛するが故に、面と向かって言うのです。そしてその言葉を、サウルは聞き入れました。しかし平安なときは、長くは続きませんでした。

(9月 9日)「サムエル記上 19 : 9~17」

ミカルはテラフィムを寝床に置き、その頭に山羊の毛をかぶせ、それを着物で覆った。
(サムエル記上 19 章 13 節)

・7 節でダビデは再びサウルの元に仕えることになりましたが、その直後、9 節で主からの悪霊がサウルに降ります。「主からの」という言葉が、とても印象的です。神さまはいったい何をなさりたいのでしょうか。

・18 章 10~11 節と同じようにサウルは槍でダビデを突き刺そうと狙いますが、ダビデはそれを避け、逃げます。さらにサウルの娘でダビデの妻となったミカルは、翌日ダビデが殺されることになっているのを知り、夫ダビデを窓からつり下ろして逃がします。

・テラフィムとは家の守り神のようなもので、等身大のものもあったようです。ミカルはそれを用いて難を逃れます。しかも父サウルに、「ダビデに脅された」とウソまでついて。サウルは婿だけではなく、娘まで失ってしまったのです。

(9月 10日)「サムエル記上 19 : 18~24」

逃げて難を避けたダビデは、ラマのサムエルのもとに行って、サウルの仕打ちをすべて報告した。サムエルとダビデはナヨトに行き、そこにとどまった。
(サムエル記上 19 章 18 節)

・ダビデはラマにいたサムエルの元に向かいます。そういえばこの書は、「サムエル記」でした。主人公のようで、かなり出番が減っています。ダビデはサムエルに、サウルの仕打ちを報告します。そして二人はナヨトという場所に行きます。

・しかしサウルは王です。その情報網は素晴らしいものでした。すぐに彼らがラマのナヨトにいるという知らせがサウルの元に入ります。サウルはすぐに、ダビデを捕らえるために使者を遣わすのです。

・しかしその使者は、サムエルを先頭とする預言者の集団に出会ったときに、自分たちも預言する状態になってしまいます。それが三度繰り返され、最後にはサウルも預言する状態に陥ります。いわゆる恍惚状態になってしまい、前後不覚に陥るのです。

(9月 19日)「サムエル記上 23 : 1~5」

ダビデは再び主に託宣を求めた。主は答えられた。「立て、ケイラに下って行け。ペリシテ人をあなたの手に渡す。」
(サムエル記上 23 章 4 節)

・ダビデはサウル王から逃げ回ります。サウルはなぜここまで、ダビデを討つのに必死になっているのでしょうか。怒りや憎悪という感情は、心の中で増大することがあります。さらにサウルには、主からの悪霊も下っていました。

・しかしそのような中、ユダのケイラをペリシテ人が襲っているという知らせが入ります。ダビデは今、自分の身に危険が迫っています。しかしケイラをほおっておくことができず、神さまに託宣を求めるのです。

・恐れる兵のために、ダビデは二度、託宣を求めました。神さまはペリシテ人からケイラを救うように伝えます。ダビデは神さまが言われるように戦いに赴き、ケイラの住民は救われました。自分の身の危険を冒してまでも、その人々を守ったのです。

(9月 20日)「サムエル記上 23 : 6~14」

ダビデが、「ケイラの有力者らは、わたしと兵をサウルの手に引き渡すでしょうか」と尋ねると、主は「引き渡す」と言われた。(サムエル記上 23 章 12 節)

・ケイラの人々を救ったダビデですが、ダビデがユダの町ケイラに来たことがサウルの耳に入ってしまう。サウルはケイラを包囲しようと目論見ます。そのころダビデの元には、祭司アビアタルが同行していました。

・祭司と一緒にいたために、ダビデはいつも神さまにみ心を聞くことができました。エフォドとは、祭司が身に着けた前掛けのような衣装です。ダビデはサウルがケイラに来るのか、そしてケイラの人々は自分たちをサウルに引き渡すのかを問います。

・ケイラの人々は、ダビデが自分たちをペリシテ人から救ってくれたにも関わらず、サウルに引き渡さだろうと主は言います。しかしダビデはそのことを非難することなく、ケイラを去ります。ケイラの人たちに危害が及ばないようにしたのでしょう。

(9月 17日)「サムエル記上 22 : 11～19」

アヒメレクは王に答えた。「あなたの家臣の中に、ダビデほど忠実な者がいるのでしょうか。ダビデは王様の婿、近衛の長、あなたの家で重んじられている者ではありませんか。

(サムエル記上 22 章 14 節)

- ・サウルは祭司アヒメレクたちを呼び出します。昨日の箇所ではエドム人ドエグによって、ダビデと会っていたことが明かされたからです。ただアヒメレクにしてみるとこっそり会ったわけもなく、なぜ王は怒っているのだろうか？と不思議だったことでしょう。
- ・しかしサウルの「エッサイの子」という呼び方に、その怒りが込められているように思います。「ダビデ」という名を口にすることすら、腹立たしかったのかもしれませんが。アヒメレクは必死に「何故」と弁解をします。
- ・アヒメレクの弁明を聞いても、サウルは怒り止まりませんでした。サウルは死罪を命じますが、主の祭司です。王の家臣は手を下すことをためらいます。結局ドエグが祭司アヒメレクを討ちました。

(9月 18日)「サムエル記上 22 : 20～23」

アヒトブの子アヒメレクの息子が一人、難を免れた。アビアタルという名で、彼はダビデのもとに逃れた。

(サムエル記上 22 章 20 節)

- ・サウルの命令により、アヒメレクを含む多くの人の命が奪われました。ここに出てくる亜麻布のエフォドとは、祭司が身に着ける装束の一つです。つまり祭司 85 人も殺されたということを聖書は伝えます。
- ・その中で、難を逃れた人がいます。アヒメレクの息子アビアタルです。彼は後に書かれています、エフォドを携えた祭司でした。ダビデは自分がエドム人ドエグを見逃したことを認め、アビアタルの命を守る約束をします。
- ・このように「自分が悪かった」と思い、語るダビデと、妬みからダビデを殺害しようと躍起になるサウルとが、とても対照的に描かれているように思います。こうしてアビアタルもダビデと共に行動するようになります。

(9月 11日)「サムエル記上 20 : 1～15」

ヨナタンは言った。「そのような事は決してない。父があなたに危害を加える決心をしていると知ったら、必ずあなたに教えよう。」

(サムエル記上 20 章 9 節)

- ・サウルの元を逃れてラマのナヨトに行ったダビデでしたが、その場所はずぐにサウルに知られてしまいます。サウルはすぐにダビデを追いますが、サウルも預言状態になってダビデを捕らえることはできませんでした。
- ・ダビデはすぐにナヨトから逃げ帰ります。そしてサウルの子、ヨナタンに会うのです。言わば、自分を狙っている人物のそばに行ったわけですから。そこには危険を感じなかったのでしょうか。どこに行っても無駄だと思ったのでしょうか。
- ・逆に言うと、それほどダビデはヨナタンを当てにしていたということでしょう。しかしヨナタンには、父サウルがダビデに対する殺意は伝わっていませんでした。そこで二人は、サウル王の心を確かめることにします。

(9月 12日)「サムエル記上 20 : 16～34」

だが翌日、新月の二日目にも、ダビデの場所が空席だったので、サウルは息子ヨナタンに言った。「なぜ、エッサイの息子は昨日も今日も食事に来ないのか。」

(サムエル記上 20 章 27 節)

- ・ダビデとヨナタンは、新月際の食卓にダビデがいないことにサウルが気づいたときに、ヨナタンの言葉にサウルがどう反応するかを確かめることにしました。ダビデはサウルは娘婿なので、新月際の食卓には必ずいなければなりません。
- ・とはいっても殺されそうになったのに、ノコノコ食卓につく方が不自然だと思います。サウルは新月の二日目にもダビデがいないのを見て、ヨナタンに「なぜダビデは来ていないのか」と聞きます。
- ・「ダビデはベツレヘムに帰らせてほしいと言っている」とヨナタンがサウルに伝えたところ、サウルは激怒します。そのことはサウルがダビデを殺そうとしていることのしるしでした。ヨナタンは父サウルに言い返しますが、サウルはヨナタンさえも討とうとします。

(9月 13日)「サムエル記上 20 : 35～42」

ヨナタンは言った。「安らかに行ってくれ。わたしとあなたの間にも、わたしの子孫とあなたの子孫の間にも、主がとこしえにおられる、と主の御名によって誓い合ったのだから。」
(サムエル記上 20 章 42 節)

- ・サウルがヨナタンに槍を投げつけた翌朝、ヨナタンは年若い従者を連れて、ダビデと取り決めた時刻に野に出ます。ダビデとヨナタンはあらかじめ、サインのようなものを決めていました。
- ・その内容は昨日の箇所、20～23 節に書かれていますが、矢を三本放って従者にとってこさせるというものです。取りに行ったときに、「手前にある」と言えばセーフ、「もっと先にある」と言えばアウトだということです。
- ・ヨナタンは、「矢はお前のもっと先にある」と従者に言います。その言葉はダビデにとって、「逃げろ」という意味です。ダビデは従者が帰ったあとヨナタンの前に現れ、別れのあいさつを交わします。ダビデとヨナタンとの愛は、非常に深いものだったのです。

(9月 14日)「サムエル記上 21 : 1～8」

祭司はダビデに答えた。「手もとに普通のパンはありません。聖別されたパンならあります。従者が女を遠ざけているなら差し上げます。」
(サムエル記上 21 章 5 節)

- ・ダビデは町に戻ったヨナタンと別れ、サウルの元から逃れます。ダビデが向かった先は、ノブの祭司アヒメレクのところでした。ダビデはサウルの娘婿に当たるため、いわゆる「王家」の一人です。そのダビデが一人で行動していることに、アヒメレクは不安を覚えます。
- ・ダビデは「サウル王に命じられて」とウソを言い、アヒメレクにパンを求めます。そこには聖別されたパンしかありませんでしたが、ダビデと従者の「清さ」を確認した後、アヒメレクはパンをダビデに渡します。
- ・この出来事をイエス様は、マルコ福音書 2 章 25～26 節で語ります。ただし大祭司の名は間違えられ、また律法を破ってもよいたとえとして語られています。このときのダビデは宗教上間違ったことはしていませんでした。

(9月 15日)「サムエル記上 21 : 9～16」

そこで彼は、人々の前で変わったふるまいをした。彼らに捕らえられると、気が狂ったのだと見せかけ、ひげによだれを垂らしたり、城門の扉をかきむしったりした。
(サムエル記上 21 章 14 節)

- ・パンをもらったダビデは、さらに武器を求めます。そこにあったのは、17 章でダビデが倒したゴリアトの剣でした。なぜそこに置かれていたのかは分かりませんが、ダビデはその剣を手にしてアヒメレクの元を去ります。
- ・ダビデは、ガトの王アキシシュのもとに行きました。ガトはペリシテ人の町です。イスラエルとペリシテ人とは、決して仲の良い関係ではありません。しかしダビデはその地を選び、身を隠すことにします。サウルの手も届かないだろうと思ったのでしょう。
- ・ただダビデの名声は、アキシシュの家臣にも届いていました。そのことを恐れ、ダビデは人々の前で気が狂ったように見せます。この辺の理解はなかなか難しいものですが、「力ある王」として振る舞えば、すぐに命を狙われたことでしょう。

(9月 16日)「サムエル記上 22 : 1～10」

また、困窮している者、負債のある者、不満を持つ者も皆彼のもとに集まり、ダビデは彼らの頭領になった。四百人ほどの者が彼の周りにいた。
(サムエル記上 22 章 2 節)

- ・ダビデはガトを離れ、アドラムの洞窟に逃れます。彼はサウル王に追われる、いわば「お尋ね者」です。しかしダビデの元には困窮している者、負債のある者、不満を持つ者が集まってきました。
- ・その様子は、イエス様の元に人々が集まった光景を思い起こさせます。そしてダビデは両親をモアブ王に託し、自分たちは預言者ガドが言うようにユダの地であるハレトの森に移って行きます。
- ・サウルの耳にはダビデが現れたことだけでなく、400 人もの人たちがダビデの元に集まったことも入ったことでしょう。こうなると王の心には、疑念が渦巻きます。誰が裏切者か、とても気になるのです。そしてエドム人ドエグによって、アヒメレクの行動が伝えられます。